



「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

| | |
|-----------------|-------------------|
| 平成 28 年 7 月 5 日 | |
| 所属部局・職 | 野生動物研究センター・修士課程学生 |
| 氏名 | 井上 漱太 |

| | |
|--|--|
| 1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域) | |
| 北海道羅臼町 | |
| 2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験) | |
| 羅臼シャチ調査実習 | |
| 3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで) | |
| 平成 28 年 6 月 29 日 ~ 平成 28 年 7 月 4 日 (6 日間) | |
| 4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏) | |
| 野生動物研究センターPD 山本由紀子博士 | |
| 5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由) | |
| 写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。 | |
| 今回の渡航の目的は北海道羅臼町で行われるシャチ調査に同行し、北海道知床地方の海洋生態系について学ぶとともに鯨類の船上調査手法に関する見識を深めることであった。 6月29日と7月4日は移動日で、調査自体は6月30日から7月3日までの4日間行われた。早朝5時40分ごろ調査船が出港し、16時頃帰港するというのが1日の流れであった。具体的な調査の流れとしては、船上から双眼鏡を用いてシャチの群れを探索し、見つけしだい接近、写真のよる個体識別データの取得、水中集音マイクによる音声データの取得、動画による行動データの取得などを行っていた。 今回の調査に我々が合流する直前に、先行して調査を行っていた同じグループの方達が、3頭のシャチに発信器を装着することに成功しており、衛星を利用した位置データを頼りにシャチの群れを探索した。 間近でシャチを観察すること自体が私にとっては初めての経験であったので、まずそれが新鮮であった。シャチは私の想像よりも大きな群れを形成することもあるようで、肉眼で見える範囲に20頭以上の個体が集合している場面もあった。どうやら、その時は繁殖相手を見つける社交の場を形成していたようである。水中マイクで取得したシャチの声を聞くこともできたが、素人の私でも数種類のパターンを聞き分けることができ、発生回数自体も非常に多く、途切れることなくコミュニケーションをとっていた。また、社会的行動を積極的に行う時間帯というのもあるようで、盛んに水しぶきをあげたり、ひっくり返り仰向けになり泳いだりと幾つかの行動も観察することができた。これらのことから、事前情報で聞いていた通り、複雑な社会を持っていることを改めて実感した。 調査を行った4日間中最初の3日間では比較的容易にシャチの群れに出会うことができ、長時間の観察に成功した。しかし、調査最終日は荒天の影響もあり、シャチに出会うことができなかった。荒れた波の中で双眼鏡を使い一日中シャチを探し続けることは精神的にも体力的にも大変な作業であり、船上での鯨類調査の過酷さの一端を味わうことができた。 シャチだけではなく、キツネやシカなどの姿を人里でも目にすることができ、羅臼町と自然の距離感を感じることができた。宿の方や同じ船に乗船していた方など、野生動物や自然を守ることにより、観光地として経済発展を進めている地域の住民の方のお話を聞いたことも非常に良かったと感じた。 | |
|  |  |
| シャチの背びれ | シャチを観察する実習参加者たち |
| <平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: report@wildlife-science.org | |

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6. その他 (特記事項など)

野生のシャチを長時間観察できるという貴重な体験を提供させていただいた山本博士をはじめとした関係者の皆様、ならびに PWS に感謝申し上げます。